山根顯道校訂

顯本法華宗要品

並回向文

貳號活字總ふりかな附

此要品は顯本法華宗初心行者の爲めに校訂出版せしものにして、貳號活字總ふりかな附なれば、如何なる老眼にても判明に、如何なる婦女子にても「いろは」四十八字を讀み得る人ならば、易々と獨習の出來得る要品であります

實費にて頒興致します、但し前金ならでは郵送しませぬ

▲用紙上等黃仙花
▲印刷最鮮明体裁頗美麗
▲一部印刷實費郵税共十四錢
▲五十部以上一冊十三錢
▲百部以上一冊十二錢 の割

東京府荏原郡品川町南馬場

頒與所 妙蓮寺

移轉廣告

今般本社左記之處へ移轉ス

山梨縣東山梨郡休息村

教友社

自今購讀料並ニ廣告料（送金ハ勝沼局宛ノ「」）寄書交換雜誌等總テ本社ニ係ル諸用ハ右移轉先ヘ宛ラレ度候

施本

雜誌

「法の鼓」

今般統一團より本誌を毎月一回發行致し只の印刷費のみにてお求に應ずる事に致しましたから何卒篤志の御方は檀家又は知人へ施本用として御買求め下さい澤山印刷すれば其だけ價を割引ますから續々御注文を乞ふ

○今日の良布教方法は

「法の鼓」を施本するに限りません、小供でも婦人でも假名さへ讀める人は讀んで解る良雜誌

○施本には限らず本誌購讀方もお勸め下さい

本誌は頗る愛らしき小雜誌なり

本誌定價

一部	二錢
壹年ヶ前金	二十錢
十部以上	一錢五厘宛
五十部以下	一錢二厘宛
五十部以上	一錢二厘宛

本誌には祖訓、說教、小說、和歌等あり

東京淺草南松山町

統一團

統一

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
日發行統一第九十八號 毎月一回十五日
全三十六年六月十五日發行）

第九十八號要目

○日蓮上人の釋迦牟尼佛觀（上）……古定不新
▲厭世宗に厭世排斥の聲これ何の兆ぞ……
○哲學者の不可解は宗教の信……松尾忍水
▲嗚呼公明正大なる哉日蓮の戰爭主義……くれがし生
○日蓮大聖人（第八回）……關田養叔
▲見ぬ「英雄僧日蓮」を評す……
○統一論壇の一小論文（村上博士の）……不新
▲獅子吼の齋藤氏と日宗の加藤氏……鷹の眼生
○佐渡の雪……笹川篁堂
▲噫不任俠新聞を起すべきか……
○大日蓮の論評に就て……澤田孤松
▲僧侶とならんとする吾夫に呈するの書……うれの妻
○うつき旅の詩……忍水
▲宗徒大會大阪に開かる……
○果敢より離れし心地の平靜……忍水

嗚呼公明正大なる哉日蓮の戰爭主義

くれがし生

日蓮の主義とは戰爭主義也や、曰く然り多義を包含すと雖其一分は即猛憤烈火の如き戰爭主義也、勇ましき軍馬の聲也、之を是れ日蓮法華の折伏主義と謂ふぞや。

見よ日蓮の把つて起ちしものは法華經ならずや、法華經は折伏主義なり、天台曰く法華折伏破權門裡と、げに法華經は敵を伏すべき寶劍なり、この劍や飽くまでも强剛者を取りひしぐに良、强剛者を伏せずんば大力士と云ひ難しとは之れを提げたる日蓮の主張、彼が大戰爭主義なりしや明瞭たり。

大戰爭大折伏のこの主義、一度これと主張せんか呪滅度後の怨嫉怒濤の如く襲來すべきに依り、彼れ日蓮上人は其初めに於て如何に躊躇せしよ、されど彼は法王の敕宣もだしがたく、乃蹶起して戰鬪を天下に宣言せしなり、故に彼の咆哮は佛勅使としての獅子吼なり彼は錦旗を擁せり、彼の叱呼は邪徒平定の接戰なり正義發輝の爲なり、即大義名分堂々整々の進軍也、法華經は節刀也錦旗也、日蓮は王師の大將也、斯くして天下に戰鬪せしもの也、

日蓮の戰爭主義折伏主義たるもの豈公大ならずとせんや。

統一主義

日蓮上人の釋迦牟尼佛觀

上

日蓮上人の宗教に入りて先吾人の注意をひくものは、其本尊論に於て釋迦中心を說き、其教相論に於て壽量品神髓說を主張して釋迦久遠論を主張し、更に實相論に入りて佛界緣起論の上より本因本果の釋迦牟尼佛を本主とせるが如きは、全く吾人がたゞならぬ興味を以て注意を引くものゝ一也、

然り吾人がこの注意は極めて必要なる注意なり、何となれば日蓮上人の釋迦牟尼佛觀はやがて是上人の佛陀論なれば也、苟も佛教教理史を辿る者、將亦佛教本尊論の研究に着手するものにして、誰か佛陀論の研究を等閑に附するものあらむや、日蓮上人の佛陀論は上人が宗教の主要なる部分を占領せり、吾人は注意せり而して更に研究せんとせり、吾人の注意に〜て必要なりとすれば隨てこれが研究も亦意味なしとせむや、

釋迦牟尼佛とは如何なる人ぞ、人か、あらず、佛か、あらず、日蓮上人が觀たる釋迦牟尼佛は歷史的人格的の釋迦牟尼佛なるか、將亦理想的詩的超人格的の釋迦牟尼佛なるか、更に哲理的宗教的系統に入れる釋迦牟尼佛なるか、人格として、の釋迦牟尼佛、佛陀格としての釋迦牟尼佛、吾人は先佛教教理史及び本尊論と相並行して、互ひに發展せる佛教佛陀論を概觀して、これより順を追ふて日蓮上人の釋迦牟尼佛觀に入るの妥當なるを覺ゆ、

ヒマラヤ山を北にしたる沃野四千餘里、ロヒニ河上迦比羅城に、首圖默那を父とし摩訶摩耶を母として生れたる悉達太子は、春を秋をと金殿玉樓に明し暮せども、將亦酒池肉林のうれならなくも茲に三千の宮女一斗の美酒うれ二つながら足らじとにはあらざれども、四門出遊の事ありてより人生無常てふ沈痛なる觀念に打たれ、疑ひ、悶へ、終に王統の相續權を拋ちて年廿九にして、一夜王城を脫して檀特山に走れり、

檀特山に走りたる悉多太子は、波羅門教の長老に就て印度從來の宗教を味ひ、更に轉して諸多の波羅門教徒に就て其疑問を解釋せむとせしも、嚴酷なる苦行にあらずんば項瑣なる思辨にして、一として太子を滿足せしむるものなし、斯くて年漸く積りて六年、王城を出でゝ粗衣粗食に六年の苦行を繼續したる太子は、身漸く疲れ心亦隨て倦み、終に尼連禪河に入りて身を洗ひ、牧女の乳糜を薦むるを受けしが、此時憍陳如等の五比丘は太子が苦行を捨てたりと速斷して終に太子と別れて去れり、太子更に猛然として起ち、伽耶に至り畢波羅

樹下に端座して沈思冥想すること四十九日間、二月八日、年三十五にして終に成道を唱へたり。

吾人はかくて悉多太子が釋迦牟尼佛となり給ひしを見ざる可らず、釋迦牟尼佛は今や武族即ち刹帝利より出でゝ印度從來の波羅門教に反對する一大宗教家となり給ひぬ、茲に於て鹿野苑の說法となり、更に摩訶陀國竹林の說法となり、轉じて故鄉迦比羅城の說法となり、四諦十二因緣無餘涅槃の教理は先に去りし憍陳如等の五比丘及び三迦葉大迦葉頻婆娑羅王父王并びに耶輸陀羅姫等に向て說れたり、かくて東西の教化四十五年、年八十にして拘尸那城外月暗きの夕、跋提河畔にして無餘涅槃に入り給ひき。

階級打破の平等主義を唱へて、四十五年間全印度の思想界に一道の新光明を與へたる釋迦牟尼佛は、其社會上に及ぼしたる功果はいふまでもなく、轉じて宗教上に於ける教理信條も、隨て波羅門教の嚴酷なる苦行や項項なる思辨のうれと異なりて、尤も簡明直截なる人道教世間教として波羅門教の舊信仰を追ひしりぞけ、多數教徒の教祖釋迦牟尼佛に對する崇拜や、其教理信條に對する信仰や、極めて敬虔なるものなりしが、而も諸行無常の眞理は、此世界的偉人をも奪ひ去るに容捨なく、寶算八十にして跋提河の行く水とともに逝て歸らぬ御身となり給ひしより、教徒の悲痛はげにたとふるに物なく、而も此悲痛の情は、やがて戀慕の情と轉じ、戀慕の情は終に崇拜の情と轉じ、一轉二轉三轉漸くにして人格的釋迦牟尼佛は理想的釋迦牟尼佛とならむとし、而して歲月の經過は彼等教徒が豐富なる宗教的詩的想像と相俟て、茲に上座部中に於ける七佛二十五佛の觀念となり、轉じて釋迦牟尼佛の御身に二十二相、八十種好、十力、四無所畏、十八不共法の屬性ありとなして、先の崇拜の情は審美的佛陀觀となり、やゝ滿足を求めんとし、茲に始めて神話的釋迦牟尼佛を搆成したり、されどこは保守主義の上座部の釋迦牟尼佛觀にして、未だ深遠なる佛陀觀とするに足らず、これに反して進歩派の大衆部に於ては、佛陀に對して形而上的本性ありと唱へ今の歷史的佛陀は假性なりと論じたり、解脫と涅槃とを得るに急なる彼等の佛陀觀は、單に崇拜のみに滿足すること能はずして、佛陀を以て濟度の力あるものとなさざる可らず、業感緣起論を以て滿足したる彼等は、かゝる幼稚なる佛陀觀を以て心靈の要求に對せしも、上座大衆の佛陀論の諍ひ漸く闌にして、更に業感緣起論か當時の思辨より無明生起の問題よりして多大なる欠點を暴露するや、茲に馬鳴によりて眞如門生滅門の二門は設定せられ、即ち眞如緣起論に依りて無明生起の根本明白となり、而も之と同時に眞如即法身てふ思想に移り、時間的緣起論かもたらしたる反面の空間的實相論は、佛陀法身論を生むに到り、更に報身應身の二身ありとなして終に佛陀三身論の萌芽を發するに到れり。馬鳴の三身論は流石に大

乘哲學の出發點たる眞如緣起の立場より來りし事とて、上座部大衆部の朴素なる釋迦牟尼佛觀を超越して、遠く宇宙論的釋迦牟尼佛觀に轉せり。馬鳴の三身論は後世新宗派の興起するに隨ひて、緣起論實相論の內容亦昔日の談にあらざる偉觀を呈して、三身論の意義も亦遷り轉じたれども、法報應の名は常に新らたなる意義を以て繰返されたり、是特に吾人佛陀論の研究に從事するものゝ記臆と注意とを要する處也、

馬鳴已後に於ては、無着の說法身證得身の佛陀觀となり、護法の自性身受用身變化身の佛陀觀となりしかども、是三身の名を轉化したるに過ぎず、かくて佛陀論は頻りに興起せりと雖も、皆悉く實相論の立場より領釋し來るが故に、釋迦牟尼佛てふ個體的佛陀は終に實相論の範圍に奪ひ去られ、終に其名は全く忘れられむとする間に、他方に於ては支那に入りたる佛教に於て、眞言宗の大日中心論を生み、更に淨土教の彌陀中心論を生むに到りたりき、釋迦牟尼佛を解釋せんとして起りたる佛陀三身論は、終に大日三身論と轉じ、彌陀三身論となるに到つては吾人其間に豈甚大の思を致さざる可けんや、日蓮上人が主として釋迦中心論を主張されたるも、亦敢て故なきにあらざる也

眞言宗に於ける大日四法身論は、即ち四重佛身論にして自性身受用身變化身等流身是也、自性身は法身なり、受用身は報身なり、變化身等流身やゝ意義を異にすれども共に應身に攝すべきもの也、大日如來といふ個體が斯の如き四德を具備して、其實相論たる即事而眞觀を以て法性身の本體となすにいたつては、如何に高大深遠なる宇宙論的佛陀論にあらずや、斯の如きは馬鳴の佛陀論より一段進みたるもの、何となれば其實相論に於て確に一轉歩を進めたれば也、

若夫淨土教の彌陀三身論に到つては如何、遠く支那に於ける慧遠の昔はいはず、近く日本に於ける淨土教諸宗に於ては報身彌陀論を說きて西方淨土を欣求せしむ、實相論的立脚地を有せざる淨土教は、流石に法身彌陀論を主張する事の不可能なる事を知りてや報身正意を以て打て出でたり、されど其茲悲本願を說く事遙に釋迦大日の上にいで、佛陀格として優に完全に近きもの、宇宙論的佛陀論は淨土教の彌陀三身論に入りて宗教的佛陀論となれり、轉じて融通念佛宗の佛陀論に到れば、應化身他他受用身自性身の四身を說きて、彌陀の本體を自性身とせり、更に彼淨土宗西山派に於ては報身彌陀を主張して、其極行酌因報身、顯酌因報身の二身を其作用に約して開展せり、是等は彌陀中心論に於ける三身の特殊論ともいふべきか、融通念佛宗の四身論は、全く華嚴法華の實相論を其中心主佛たる彌陀に及ぼして、而して大成したる者、

茲に注意すべきは元來釋迦牟尼佛を解釋せんとして起りたる三身論が、何故に大日中心の三身論と轉じ、彌陀中心の三

身論と轉じたるやの疑問是也。こは主として大日經と阿彌陀經との本文に基きて、大日いで、彌陀いでたるなるべしと雖も、是終に佛敎の汎神論的思想の爲に却て種々の人格的實在を描きしやの感なき能はず、大日經阿彌陀經其他多くの大乘經典に對する近世思想を以ての本文批評が確定せざる已上は敎相論の價値も定まらず、隨て大日中心論も彌陀中心論も佛陀論上に於ける位置確定せず、要するに大日彌陀てふ個體的名辭は釋迦牟尼佛てふ個體的名辭と相對立して、佛陀論上に於て如何なる輕重を有するや、吾人は人格的實在者としても宇宙論的實在者としても正系的釋迦牟尼佛をとるの至當なるを覺ふと同時に、よし宇宙論的實在者としての大日彌陀と雖も、終に傍系的一時的の假象なりと斷せざるを得ず、こは日蓮上人の釋迦牟尼佛觀に入りて詳細に論ずべきもの、吾人別に大に見る處あり。

要するに大日中心彌陀中心の三身論は、生を示し滅を示したる現實無常の釋迦牟尼佛にあきたらざる情と、經典の本文と、其他自家特殊の實相論若くは緣起論の系統よりして、勢ひ常住の佛陀を描出せんとしたる結果に外ならざる也、

彼天台宗の敎系に横はれる佛陀論は如何。法報應三身の名は依然として馬鳴が述べたる如くなれども、其根底を爲せる實相論は昔日の談にあらず一念三千は正にうれならずや、此重に立てる三身論は、報身に於て護法が唱へ出したる自受用報身、他受用報身の形式を應用し、自受用報身を以て智德圓滿の果佛となして報身正意を主張し、更に應身に於て劣應身、勝應身の二身を開展せり、

天台の敎系に入れる三身論は三身論として殆んど完全の域に入れるが如し、三身の不縱不横を論じて關係論の圓滿と告げ、三千無始常住の實相論より三身無作の論となりしと雖も、其實踐門に於て理觀ととれる故に、三身の修顯的佛陀を立つるにいたらずして、本具無作の三身論に下れり、宇宙論的三身論は今や行門的三身論に一轉し來れる也、

更に三身論が淨土敎諸宗及び天台宗の敎系に入りて後は、三身と淨土との關係尤も密接を來したる事是也、彌陀に在つては報身として西方に報土を立つるが如き、更に天台の如きは實報寂光同居方便の四土を立てゝ三身に配するが如きは、如何に三身論が宗敎的に歩一歩進み來りしを證すべきあらずや。

吾人は再び繰返す、釋迦牟尼佛を解釋せんとして生れ出でたる三身論は終に大日中心彌陀中心の敎系に入りて他面に圓滿なる功を奏せしも、却て釋迦牟尼佛の解釋を閑却し去りたり、出發點を忘れたる佛陀論は其終局點に於て果して妥當なる佛陀觀を築くの運に到るべきか、佛敎の發展が宇宙觀若くは行門論にのみ走りて、本尊論として何等特殊の發展をなさざりしは、或は此出發點を忘れたる佛陀論のうれが一大原因を爲せるにはあらざるか、釋迦牟尼佛に對して信仰、戀慕、崇拜の心靈の歷史を通過したる原始佛敎の敎徒は、更に神話的寫象し、亦た更に宇宙論的に寫象したるにあらずや、玆に於て若極力佛陀論に向て歩と進むるものありしならば、佛敎敎理史と相挾つて、佛敎本尊史と編むの結果を來したるやも計るべからざる也、

然り斯の如くにして釋迦中心の三身論は他の中心點の三身論となれり、吾人は前來原始佛敎よりの佛陀論と概觀して三身論が高潮に達する毎に、忽然として他の佛陀顯れ、釋迦牟尼佛てふ觀念は遠く離れ行きつゝあるを見る也、吾人豈甚大なる思惟を茲處に致さざるべけんや、

かゝる思惟を抱きてやゝ疑問を帶びたる吾人は、日蓮上人の釋迦牟尼佛觀に入りて、全く天晴地明の感に打たれたり、其本尊論に於て釋迦中心を說き、其敎相論に於て壽量品神髓說を主張して釋迦久遠論を主張し、更に實相論に入りて佛界緣起論の上より本因本果の釋迦牟尼佛を本主とせるが如き、殆んど總ての方面に於て釋迦牟尼佛を顯揚せり、かくて日蓮上人の佛陀論は明白に釋迦中心論に一轉せる也、（上終）

各面評論

哲學者の『不可解』は宗教の『信』

○一少年哲學者藤村某、『不可解』の三字と永く斯の世の別辭として華嚴の瀧に軀を投ず、『不可解』とは彼が無極の事理を諦めんとして得ざりし苦悶の痛音なりしなり、幽玄門裡の消息を聽かんとして得ざりし焦慮の苦聲なりしなり、豈悲慘ならずや、

○所謂哲學てふ一種の學問、この學問に憑つて以て吾人は無極の事理を知り得べき乎、幽玄門裡の消息を知り得べき乎、

○無極の事理は遠大なり、幽玄門裡は深冥なり、而も人間は大なるに似て最も小に、哲學は長きが如くして甚短きものなり、最も小さきこの人間は甚だ短なる哲學の測量器を以て彼の遠大、彼の深冥を計量せんとする也、計量結果の報告を得んとする夫れ難い哉、

○於是乎、或は自己の管見に滿足し、然らざれば煩々悶々遂に『死』あるのみ、曰く『不可解』、代ゆるに死の他なしと、遠くシセロが『哲學は死と想はしむるの研究』と叫び、近く藤村某の投死せるもの實に所以ありと謂ふべし。

○哲學は、無極幽玄に對する研究に得たる最後の結果に於ては、遂に何等の効を見るなくして終るものなり、哲學既に然り餘の科學到底之れが研究にあらず、學問なるものも此の大研究に對しては實に果敢なきものと云はざるを得ず、朝霧深きものは中午には晴るべし、玄幽の消息は遂に吾人の耳朶に觸る可らざる所のもの乎、否、

○吾曹の否と云ふもの、學問に憑り研究に依るものに非ざるは焉を諒する所なるべし、無極の測量　幽玄の消息は嗟嘆するばかりに至小なる吾人が、決して自力自覺すべからざるや勿論にして、ひとゑに先覺者絶大の顯示に他力依賴するの他あらざる也、先覺者とは誰ぞや、釋迦大佛陀なり、他力依賴とは何ぞや信仰なり、大佛陀と吾人の信仰、此間の消息を名けて宗教とは云ふなり、宗教々々　げに宗教に依つて初めて無極の遠量を信解し得べく、幽玄の消息を傳聞し得べし、疑義此に明に苦悶此に去り、恰も天晴地明の心知ならん也、

○然らば則宗教あらば哲學無用なる乎、哲學は嘗に人生の大研究を晴す能はざるのみならず、寧ろ苦悶を增益せしむるに似たりとの疑あらん、されど吾曹は斯く迄に極端なる義を主張するものには非ず、唯宗教の活用なくして、遂に求め得べからざる哲學に無限の理を發見せんとするの愚を憫笑する而已、

○今日の所謂哲學に『不可知』を存す、猶支那哲學の『玄』の如きなり、玄とは黑也幽也冥々として知る可らざるを指すなり、『不可知』や『玄』や既に『不可解』の異名に過ぎずして、これ己内は即ち宗教の領域に屬す、然るに他人の領域に侵入して自ら好で網中の妄見兒たる哲學者輩、げに愚と稱するも何の差支かあらん、

○最覺科學たるもの宗教の前駈と見ば可なり、殊に其哲學を辿つて不可知に接せば一躍して信仰家となるべき也、妙樂大師云『佛教流化　實賴二於茲一　禮樂前駈、眞道後啓』此に云ふ所の禮樂の文字唯に道儒のみに限らんや、

○無極幽玄遂に宗教の信に入らずんは知る可らず、一度不可解の羈絆を切斷して信界に入れば何が故に之を諦むることを得るや、开は佛陀は本來より大覺者にして慈悲甚深、久遠劫來吾人を迷悶より救ひ出すべく世に出現し給ふ『欲令衆生開佛知見云云』是なり、斯の如き大覺者の智惠は廣大無邊にして盡十方に達せざる所なく及ばざる所なし、而も吾人は從順柔軟にして唯一心に之を信解せば、茲に信智契合して身は是れ六尺の臭軀なりと雖直に無明の疑惑界より脱するを得べし、滊車に乘れる旅客が其目的地に達するが如く、赤子の母の乳を飲みて生長するに異らざる也、來れ『不可解』に苦悶せる人々、滊車を疑ふこと勿れ、母乳を疑ふこと勿れ、宗教の信仰はれのづから其疑義を明快ならしめ苦悶を脱却せしむ此他に又道あらざる也、

○尚一言しをかなん、無極の事理と云ひ幽玄門裡の消息と云ふは、彼の迷悟論や苦樂論や運命論や世間學者の到底此れが眞髓を明にする能はざる底のもの、況や其因果論や依正論や人法論や生佛論や乃至十界論やに到つてはこれ夢にだも明む可らざる所耳、例せは孔子を見ずや世間は彼を以て聖人と尊崇せり、而も彼は其弟子の三世論の問に對し一の答ふる所なかりしならずや、其己下察すべし、日蓮上人誨へて曰『此等の聖賢の人々は聖人なりと云へとも過去と知らざること凡夫の背を見ず、未來を鑒みざること盲人の前を見ざるが如し』と、然るに吾人は大覺世尊の顯示に信賴するに於ては、些の焦慮苦心を要することなくして、予の所謂無極幽玄を諦明し得也、嗚呼吾人は迷に走つて唯大佛陀の大乘に救れはん哉、

○若夫れ不可解の結果、遂に慢然自己の管見に滿足するもの丶如きや、所謂涅槃經の盲人巨象を撫するの戒諭も思ひ當るにて寔に憫然に堪へざる也

見ぬ『英雄僧日蓮』を評す

○呦鹿庵新たに『英雄僧日蓮』を公にせりと云ふ、予未だ之を讀まず、而も其著者の名を聞くと同時に早く己に其眞相を知りたり、何ぞや呦鹿庵の『英雄僧日蓮』は彼の最も醜險なる筆を揮ひし『日蓮深密傳』的のものならん是也、深密傳とは往昔念佛徒が法華折伏の甚しきに堪へやらで苦痛なきの毒藥もりなり、毒木に甘味をぬり、ぬるめげる言葉を以て腰のものを奪ふ筆方なり、呦鹿庵は二十世紀の新空氣を呼吸せり深密傳の著者はどの陰險なるそこわるの思想はあらざるべしさはれ彼が曾て二六へ掲げし日蓮評に依つて、いかに彼が惡的方面の推察力に富めるかを知り、必ずや此著の又彼の深密傳的著者なるべきを察したるに、果せる哉今聞く所に據れば全冊百六十七頁、只、惡遺傳、穢多の兒、惡魔、鬪爭主義赤血色、等の惡感的文字は著作の基礎たるが如しと云ふ、深密傳は六老僧の名の下に、尊敬の語の下に、識す知す此等の惡感を抱かしむる著者の用意なり、「英雄僧日蓮」の著者は『英雄』と云ひ『多大の崇拜を拂ふ』と云ひつ丶讀者をして幾多の惡感を抱かしむ、時勢と文字とは相違せんも其筆方に於ては一ならん、然れども若し彼が豫め隱險の思想勃々として之を書せしめしにあらずして、彼の深密傳的の二三書冊に養成せらる丶所ありて此を著せしものとせば其罪は稍小なり、予は折を待て其著を讀むことあらば更に之を評せむ、

（日宗新報の紫雄君、此の著を評し其終に附記して曰く「要するに本書にあらはれたる大聖人は、喧嘩好きの向見ず坊主なり、ひねくれたる剛情坊主なり、換言すれば虎を描かんとして、猫に似たるものを得たるのみ」、予は然らず彼れ呦鹿庵は此著作を爲すや、豫め喧嘩好きの向見ず坊主を描かんとたくみしも、ひねくれたる強情坊主を寫さんと期せしなり強め虎を描かんとせしにはあらずと信するものなり）、

噫不任俠新聞を起すべきか

○所謂任俠新聞、彼の徒は旺に痛罵を爲す、而も其痛罵が或は記者の本領を發揮するにあらずして、新聞を賣らしむる爲にあらざるなきかと疑はしむ、政治家の無節操、學者の曲筆、教育の腐敗、宗教家の墮落等喋々呶々日々二號大の文字を以て見ざることなし、腐敗墮落之を云ふは甚良しと雖、一面眞摯なる用意を以て之を訓誨するの筆なくんば、唯一時の人氣に投する迄にして、讀者の眼は之に馴れ弱心は遂に增長し、害毒却て甚しきものあらん也。而も如斯任俠新聞は今や萬朝二六と初めとして東西其數夥多と爲す、其小新聞の甚しきものに至つては畢竟ユスリの材良として發行せるものさへあり、されば其記事亦察すべし、其社會主義を宣言し、或は正義、義俠、懲惡等を呼張して立てる任俠新聞、それが今日の如き有樣ならんには、吾曹は即ち不任俠新聞の大に現れんことを望むものなり。不任俠新聞、汝の現れたる曉は必ず懲惡を叫ぶ口を以て勸善を云へよ、腐敗隨落を喋々する口を以て美德善行を奬勵せよ、吾曹の曾に之をいふは全き思想にあらざれとも彼等に對して又止を得さる也、是れ眞の任俠新聞の意を全ふする所以なればなり、

厭世宗に厭世排斥の聲、これ何の兆ぞ

○厭世は勸信上の一要素たり、强ちに捨てべきものに非ず無常を說て常住を願はしむるは佛乘步行の格なり、門外の愛山すら曰く無常觀は人心を殺すのに非ず、有爲の氣力を減ずるものに非ず、圓滿なる心性の發達を爲したるものにありては、却つて、其冒險敢爲の精神を鼓舞作興するものなることと、何となれば、無常觀の半面は、即ち有限に羈縛せられすして無限を希ひ、小功名に甘んせすして、不朽の生命に達せんとする深遠なる希望なればなり、と而も近來厭世主義を本色とせる某々宗等に却て厭世を排斥するの聲を聞く、是れ何の兆ぞ、それ元來厭世たるや更に樂天に着かしむる迄の誘引とすべきものにして斯の場合には必要なりと雖、若彼の厭世を以て主義本色とせるが如きは眞に佛道の常規に非ざるのみならず、其害を覺りたる時は即破滅を免れざるの時也、今の厭世宗に厭世排斥の聲現れしは其害を覺りたるの時ならざる乎、さらば破滅すべき乎、それとも或は一轉して旺盛の火焰を上ぐるなるか

（以上　忍水）

宗教文學

日蓮大聖人（第七回）

佛城　關田養叔　講演

蓮長師は、翌朝早く此家を出まして、やうやくに鎌倉に着き車小路といふ處に、かねてより緣故ある人か居りますのを幸ひ、こゝに四五日の間逗留をいたし、旅の勞れを安め傍、鎌倉の樣子を見るに、時の天下の御膝元でありますから、武士でも出家でも學者でも當時に名ある人は、悉く此の土地に集り、到る處賑やかで人馬の往來も繁く、人の氣質から其の外見たり聞たり致すことが悉く田舍の樣子と大に違ひます、思ふに日蓮聖祖か後來此の鎌倉の街頭に立て、辻說法と致し、法華弘通の旗を揚げる樣になりましたのは、此の當時既に見定められたものでありませう、

扨て蓮長師は晉に名高き淨土宗の大阿上人の敎と聞かんものと、鎌倉の問注所から十八町ばかり東へ偏つた霧ヶ澤好見の庵室を訪ねて參り、彼の念佛の一門を弘め鎌倉中の男女を集めて頻りに淨土極樂の功德を說いて居る大阿和尙に面會いたし、自分の素懷を述べて、其の法談の席に列りました、これより心をこめて淨土宗の敎意を研究いたしますするに、此の淨土宗は日本では法然上人が開いたので、三經一論と申して觀經、雙觀經、阿彌陀經と天親菩薩の往生淨土論とを基として宗旨を立て、この罪汚多き世の中と早く捨てゝ結搆な淨土へ生れる樣に願はねばならぬ、如何なる五逆十惡の惡人凡夫たりとも南無阿彌陀佛とさへ唱へれば西方十萬億土の彌陀の淨土へ極樂往生が出來る、法華眞言ろの外の一切の經文は悉く擲てよ、彌陀一佛の外は如何なる神樣でも佛陀でも決して拜んではならぬ難行である雜行であるといふにあるのです、

法然上人が建曆二年に遷化いたしてから、今年曆仁元年まで僅に二十七年程でありますが、此の當時、念佛宗は非常に盛んに流行いたしました、斯樣に念佛宗が盛んに弘つた原因は、是迄は天台、眞言、禪宗なぞ申す理屬の六ヶ敷宗旨ばかりであつたところへ、阿彌陀樣の名號さへ唱へれば誰れでも佛に成れるといふ、其の說くところが至極簡易のと、夫れから當時は源平の戰ひの後で、世の中が非常に殺伐を極め父子生別を爲したり妻を失ひ夫に先たれたりして、嗚呼世の中といふものは詰らぬものだ厭なものだと思ふ樣になつて居たところへ、念佛宗が附け込むで、此の汚れた厭な世界を早く捨てゝ西方の阿彌陀樣の側へ行け結搆な樂みは淨土だからと勸めた、謂はゞ世の中の念願通りにピタリ當てはまつた、斯る譯からして念佛宗が隆盛を極めたのであります、

蓮長法師は、大阿上人に就いて念佛安心の法門を學ぶと同時に、又、法然上人の孫弟子に當る學問もあり解りもあつて念佛門では中々名高い然阿良忠といふ方が、この頃同じ鎌倉の佐輔が谷といふ處に居つたので、此處へも通ひまして、更に精しく淨土宗の法義を研究いたします、

蓮長師は、かゝる中に一兩年を送りまする内、彼の好見の大阿上人が病の床に就き、古今稀れなる惡病を患らひ大層な苦みといたし、夜晝庵室の中を轉つて泣き呻り七轉八倒の中に空を掴んで死んで了つたが、其の死んだ相を見ると身體は縮まつて小兒の如く、其の色黑くして墨を塗た樣であつた、蓮長師は、かゝる話を隨身の弟子等より聞きまして、「……守護國界經の中には死人に付いて十五の相と明し摩訶止觀にも死人の形相を悉しく說いてある、斯る經釋に照らし見るときは、大阿上人は正しく隨地獄の相形を現はしたものである、淺間しひかな、凡俗の身なれば兎も角も臨終の安心を授ける學德圓滿の出家の身でありながら、憐れ臨終の正念を失ひ地獄の相を現身に顯はすとは何事ぞ、佛の御意に悖れる現罰なるか！……」と大に歎息いたします、

蓮長師は熱心に念佛宗を研究したるの結果、法然上人の弘めた淨土念佛の敎義は、釋尊の御意に協はない所の宗旨で、經文に背き佛法を破り國家の爲めにも宜しくない宗旨であると斷定いたしまして、後年に及んで念佛無間といふ大折伏を致すことに相成ります、

蓮長師は念佛宗ばかりでなく、更に進んで天台、眞言、律、禪等の諸宗とば、其の宗旨々々の高僧がたに就いて研究いたしました、

經つ月日に關守なきの譬ひの通りで、蓮長師が佛法修行の爲め鎌倉へ參りましてから玆に前後五ヶ年の歲月と過し學問修行の傍ら具に人情風俗を探り、胸の中に大に會得するところあつて一先づ故鄕房州に御歸りに相成ります、

うつき旅の詩

忍水

都を出でんとす、不新君予を日本橋に送る、依りて某亭に入り別杯を交す、彼予を送るの詩（本誌第九十五號にあり）を吟ず、予之を謝して

うしろ髮

この歲の都の花は散りぬべし
さはれ怨は多からじ
月みたば更に君とは遭ひぬべし
と云へ名殘にしめりあり

後髮曳くやもつるゝ心まで
ひとり解くにも惜き哉
恩と戀と友の情の乱れぞや
小櫛解く手は君にあり

問ひますな都の花の香によひて狂へる蝶のうかれいでしを

本多師と隨伴、鳳凰山を出で、四下すべく品川驛に至る、紫葉君送り來りて愛別す、

あかねさす入る日とゝもに君立ちぬ朝日輝らさば都しのびね　（紫葉）

旅空は君の情のとりはへて
うすから衣しみ渡るらむ　（忍水）

九重の都の花のおしきはど
こゝろひかるゝ八重の花雲　（忍水）

いにしゑのみやこの花と君し訪ふこゝろなりとも
吾をともなへ　（紫葉）

師刈の敎に鳥城內山下弘通所に靜臥し給ふ、別莊廻廊の晚櫻爛熳として師ん慰むるに似たり　（四月十一日）

いたづきを見舞ふ振りなり庭櫻
散る花や下女捨てかぬるたらい水
さる窓にとぼろ月夜の花見かな

ちりしをば箒にかけう晚さくら

師山吹の花を尋ね給ふ、われ之を信徒にはかりその一瓣をさゝぐ　（仝十二日）

折る袖のいか匂ひけむ一技は
こかねくづるゝ山ふきの花

山吹はまた山ふきの風情かな

師の病殆ど癒にふくす、十九日いとまを得て歸省す、二十日演說會を催す、所感あり新詩なる

里の山川

あなつかしの里の山
あなつかしの里の川
あはげば笑顏崩るまで
ふせば十里にひゝく聲
昔はしらじ今の身は
罪も悶も重かるに
好ましぶりのうの樣や

こはあやまりよ我として
いぶかることの笑止さよ

我いま何を戀してぞ
故里の地には歸りしか

慈愛の母は待つとても
知れる友人ありとても
もしなつかしき山川の
迎ゆるなしと定まらば
なぜて歩みの運ばれん

よし我こゝに里人に
眞の道を傳へんと
赤き心をうのまゝに
口に染め出すから錦

さはれ里人花に醉ひ
我の言葉をきかまじか
さらば山川なれらのみ
母諸共にきけよかし

罪と悶はありとても
言ひ出るものは御佛の
ひめし眞の法の道

うれ人間は云はでかも
草木國土成佛の
廣き救の敎なり
いかで救ひにもれべきや

故郷よりの歸途、山藤を手折りて之を師にさゝぐ

人たゐし奥山藤の一枝は
むらさき深くけふ匂ふなり
紫藤の一枝は土産や師の元に

以上

僧侶とならんとする吾夫に呈するの書

それの妻

吾敬愛なる夫の君よ
儂の日頃より思ひ居たりしは今時佛敎の僧侶ばかり凡俗にして理想なく遊惰にしていまはしきはなしとのことにて誰人かが云ひけむ僧は俗より出でゝ俗より俗なりとの言葉もさこうと思ひ待るにて候ひき其まとへる衣の麗しきこと天女のそれかと見ゆるばかりなるにもはぢず其の品行の修まらぬことといかに甚しとは思召さずや其の住居廣く深く且つ巨なるだけうの人は傳道者としてはいと小さし儂はかゝる人等の住と衣と食等が何事をも宗敎上には解し得ぬ多數の民の汗と血なることを思ひてみ佛の神聖をけがしはせじやとひろかに憂ひたることもしば〳〵にて候ひき

女の身としてあまりに云ひ過し待りぬ這は儂いとけなき頃よりして僧侶とはかの尊き道を說く人なることを覺るあたはで月と年と共に僧侶をいとふ心のまさりゆきつ形が惡き方をのみ見さだめぬたりしことゝて思はずも云ひ過せし言の葉のかず〳〵罪あらば御ゆるしを賜へ

不思議とも不思議かくまでにいまはしく信じぬし儂に傳へ給ふ、良人は今やうの〳〵僧侶の身とならせ給ふ由をこゝに儂すぎにし頃の種々なる空想をくり返し又未來さま〳〵のことゝも思ひ浮べ萬感ともん〳〵至るにて千々のおもひ糸の乱るゝばかりに候ひしも屹度心を定めてさて靜に考ふれば案に違ひたる思慮を得候ひぬ今良人の僧侶として立たせ給ふてふ問題に對して儂は差の不同意あるなく何苦いまはしき感もなし只うれしく歡ばしくそゝろに勇ましき心地さへ致し候そは良人の職に就せ給ふや迷へる多數の人々を救の道に入れて敎化の實を擧げ給はんは疑ふべくもなく而して儂も共に大にして神聖なるみ佛の御前に歡喜の人となるべく又必ずやあはれなる俗僧と同じからじと深く信認すればなり、敬なる夫よ儂は良人に對する信認のみならず儂がいまだ良人に嫁せざりし已前に於ける信念よりも其根本義の眞理が良人の信仰にありしを覺り待りぬ、されば僧の尊きもいやしきもあながちに道の善惡にあらぬをも悟り申しぬ扨ては正しき道を傳ふべき僧の尤も清廉潔白なること御佛の御使なること貧に似て大福長者なること樣なきに似て主上の師ともあはかるべきことなど思ひ當り斯くて光榮ある僧侶は儂が曾て思ひ〳〵がめし雲霧より漸く醒めて扨こう同意し觀喜し待に候ふなれ、オ、夫よ良は其光榮ある僧となり給へ而して正義の大福音を傳へ給へ決して志を翻し給ふなよ

嗚呼良人は聽て僧侶となり給ふなり宗敎家としての眞正なる天職を全ふし給ふなりさて妻たる儂は彼の厭世によつて僧となりたる西行の妻のごと或は別居し或は黑髮をそりてばつに及ばざるよしは良人の奉持し給ふ敎義上に於て聽きしりぬ儂は潔き僧侶の妻として公々然天地間絶ゐて耻なけれども今退て念ひ見れば僧侶の妻として彼のいまはしげにあだなさるゝ人々よりいや重き責任あるを自覺しぬ去ば能く夫を扶けて儂の任務を果し得べきやかへり見れば已はたゞ是れ愚なる一婦なるのみ而も身には罪あり心には悶あり〳〵いかにせんそれよ御佛の御前に打ち伏してたゞ一心に祈らばや

夫の身に絶へず大なる慈悲の光明を垂れさせ給へ、樣々の方面よりおびたゞしく襲ひ來ん惡魔をしりぞくるに力をうゐさせ給へ、必ず吾夫は大聖主の御懷を世の人に傳ふるなるべし

敬愛なる夫の君よ、良人が僧侶として立ち給ふ時儂の胸にたゞひろむるものは右の新禱なり夫よ良人は常々主義と目的とうれが聖主の御本懷なる由を語り給ふいで其大なる決心をもて救の軍ととこし給へ義の戰と擧げ給へ幽に下の方に救の叫の聞ゆ候ことよ儂は儂は良人が主義目的を達せんと爲し給ふ時に一ッの玉の緒のうを切りはなつに何の躊躇をかいたすべき

たゞ〳〵良人にのぞむらくば公大堅固なる其御心磐石の如くして動かず惡魔と鬪はせ給ふ時も絶へず聖主の眞光を背にうけて進ませたまはんことを

かへす〳〵も過言をも打通してゆるし給へ文のとゝのはぬは眞心より出しにあがないてよ

六月一日

松、藤、　なにがし

みどりの松
天と青し
紫の藤
入る陽に搖る
丈餘雲る花ふさ
雖の手とつなざし
松は夫よ
藤は妻よ

紅蓮白蓮

統一論壇の一小論文（再び）

（村上專精氏の佛教統一論第二編原理論を讀むで）

○茲で私くしは、氏が本尊論の批評に移ります、

○氏は先日蓮の宗教には法本尊人本尊の二つの本尊論があるといはれました、私は思ふ一躰日蓮上人の本尊論におきまして法本尊とか人本尊とかといひまして二つに區別する必要があるのでありませうか、佛教の實相論に對しましても人格論に對しましても、今までの學者は統一的綜合的の研究が積まれて居りませんに、案外にも佛教全躰の意義が發輝せられて居りませんのは、私の常に殘念に思ふて居る點であります今村上氏が堂々と佛教統一論を公にせられましても佛教の統一的研究が今一息深刻に打込んでありません爲に、纔に日蓮上人の本尊論を見られますのにも御書の表裏を縱横に見透す丈の事を敢て爲ないで「本尊問答抄」は如何であるの、「觀心本尊抄」がどうであるの、「報恩抄」がどうであるのといはれますのは私の太だ遺憾とする處であります

○氏の本尊論に於きまして、人本尊法本尊を論せらるゝに當

りますのに、氏が御書の御文を引かれまして論證せられます容子は、恰も日蓮門下の古來の學者が、即ち相承的古敎權的學者が、御文をひきます場合と其容子が少しも異りませんのには、私はむしろ一驚を喫しました、

○どうも餘り其容子が紹介的に流れましたのは私の甚だとらざる處で、むしろ博士としての氏の學見が餘り價値がない樣に思はれました、

○第一法本尊論の論證に擧げられました「本尊問答抄」で法は能生佛は所生であるとの一句をとられました如きはどういふ心持で御座いませう此一句が實相論と關聯しまする場合はどうであるかさて亦再往論としては能所の先後があるものかないものか、更に再往論としては法佛の關係か如何に變轉いたしますか、更に法本尊としての立證の文が人本尊の或意味を裏面に含んでは居らないかと、斯樣に二重三重の深奥なる研究をせられないで一向法本尊は一念三千の妙法を中心として其四方に人格的諸尊を列記したのであると、形式一遍の素通りの研究では、三身論も實相論も其處に何等の交渉がない事になりはしますまいか、

○更に人本尊を論せらるゝに當りましても、やゝ敎相論に傾きたる或一段の「本尊抄」の文をとつたり、佛々相對論から來ました「報恩抄」の一段をとられましたりして、其極宇陀那日輝の本尊略辨の思想を多く用ひられました、人本尊とはこれ位の論で成立するものではありません、亦古來門下の學者がこんな論證の下に人本尊を成立せしめんといたしましたのは、大なる誤見でありました、唯御義口傳の一文がやゝ三身と實相との調和を試みた樣な觀があります、この御文を人本尊の論證にのみ供しますのは或は多少當を得てをらない樣に思ひます、私しのは少し見方が異つて居ります、

○然し村上氏は此人本尊は專ら「觀心本尊抄」に於て論せられたといはれまして、然し「本尊抄」は釋尊と吾人の別ならざる事を論せられたものであると斷じて、此釋尊は法身の釋尊であるから一念三千と同一であるといふ論斷を以て、法本尊人本尊は其根底に於て一致するものであるといはれました、

○釋迦法身論が吾門の宗敎に於きましてどれ丈の價値があるかは自ら別問題でありますが、今氏の人法本尊の一致論は或は少し實相論の範圍に佛陀格が入りすぎはしないかとの恐があります何となれば法身といふものは宇宙の實相うのものを指して命名したものであるからです、私は佛敎の實相論人格論は、宗敎哲學の立場から見て實在の萬有的寫象人格的寫象といふのが、此兩者の關係を圓滿に說明する所以ではなからふかと思ひます、さうすると三身論も實相論を離れて獨立した立場が出來る樣になるし、實相論即ち萬有論も三身論を離れても別に欠點が生ずる事がありません、法か先だの人か後だの、人が先だの法が後だのといふ議論がありますが、此等

は佛教の萬有論人格論は實在を寫象したものだといふ事が判然しないからです、即ち觀念論的實在の意味が判然して居らないからではないでせうか、

○然し實在の觀念を寫象して起つた人格論と實相論とが、或點に於て全く一致結合して此に完全な本尊が成立する事は自ら別問題でありまして、茲に此を述べる際かありません

○但し村上氏の人法一体の論調とは趣を異にして居ります、

○要するに氏が釋迦法身論の立場から、人法本尊の一体を斷せられましたのは一の卓見であるかは知りませぬが、是として三身論上釋迦法身の論は甚だ幼稚なもので、未だ佛界緣起の高妙深大なる教理に達せざる爲、報身應身の常住を知られない事もあるし、旁々多大な欠點が暴露せられて居ります、然し人法本尊の一体を主張するのには是非法身論に入らなければならないのでせうか、是では人本尊の意義がむしろ皆無となつて法本尊に一致したのです、人本尊の特性が無くなつてまでも法本尊の特性に一致する必要はありません、氏の人法本尊の一致觀は失敗に終つたといはなければなりません、

○無論釋迦法身論より顧みて「本尊抄」は法本尊の説明であるといはれました二重論斷も、私は到底首肯する勇氣がありません、

これでは此位でよしまう　（不　新）

佐渡の雪

名花朗月、歌舞の樂み、うの夢さめやらで、保元平治の大乱と惹き起しうのきわみは、名教廢れて、君臣の名分濫れ鎌倉の武權は朝廷を壓倒しうの威風は靡然として、人道を左右にせり、國民感化の責任ある僧侶は、劍戟をこれ事とし哀れ、形は沙門の如く、心は屠兒に似たり、世の中れしなべて、利欲のためには、君もなく、親もなく、忠孝の道に、そるゝとも怪むものなきぞ、うたてけれ

承久三年は奈何なる年ぞ、無道なる北條義時は君臣の名分を忘れ、後鳥羽法皇を隱岐に、土御門上皇を土佐に、順德上皇と佐渡に遷し奉れり、父子兄弟の愛情は人の常なるに、一天萬乘の帝位を、しろしめす大君も一期再會の時なく、後鳥羽法皇は、十九年、土御門上皇は六年、順德上皇は二十年、磯打波に、思をよせ、夜半の村雨に袖を濕して、濁世を嘆き給ふ、

かぎりあれば、茅が軒端の、月もみつゝ、
知らぬは人の、行末の空

臣子の分として、たれか、この叡慮を慰め奉るものやあるべき、僧も俗も、權勢に阿ねり、富貴に淫する而已、鎌倉時代の名教思想は、所謂猿に衣裳……

此に北面の武士遠藤爲盛は、承久の役に一とかどの功名せば

やと思しも敢なく、逆臣のために敗られて、君は九重の宮を出てさせ給ふを見るに忍びず、順德院に供御し參らせて佐渡の島根に移りけり、

かゝる折には、頼みがたなきは、人の心ぞや、都を出でしうの時は、歌道の泰斗と人のはやせし、冷泉爲家も御院の供して來りしが、衣食住の苦しさに、堪へかねし乎、利達のために心奪ばれしか、君をうしろに逃げ歸れり、遠藤爲盛のみは痛ましき御院のありさまを、物うきことに思ひ、泣かぬ日とてなく、御院在世の間、二十年一日の如く御奉公申上げぬ、

月日の駒の、いと早く承久三年より今茲、文永八年まで五十年をすぎ去りき　鎌倉の威勢は、昔に增して、大内山を吹きあらし、たれ一人、皇室のおんために、大義を稱道するものなきぞ、腑甲斐なき、

思ひいだすも涙の種、この涙、これやこれ、慷慨悲憤の涙、あはれ、時の人、國のため、世のために涙なかりし乎、われは、ぬぐふに寄邊なき流浪人の悲しさ、一とたびは、大義の旗をあげなんと朝な、夕なに、想ひ暮せぞ、寄る年波の甲斐なき流浪人の悲しさ、八十路の坂を越へて、死出の山にと、近付けり、今生の思ひ出には、大義輝く、日月れがみ參らせたし、うれも、かなはぬ流浪人の悲しさ、

空しく佐渡の深雪に埋れて　煩悶遣瀬なき遠藤爲盛の心事哀れならずや

待てば海路の日和かな、これもこれ、濟世救民のそのために、立正安國の大義を提唱し、君臣の名分を大聲疾呼したるために、鎌倉の迫害をうけ、一とたびは、伊豆國にと流され、今また、佐渡の嶋にと謫流せられたる日蓮上人こそ、遠藤爲盛に甘露の涙と注いて廓然大悟せしめられたり、偉人義士の會見は、實に文永八年の冬深雪ふる、佐渡國大野の里塚原の三昧堂なりき

忠義の心あつき、遠藤爲盛も、佛法の大義に暗らく、阿彌陀佛を救世の父と仰き今生に便りなき身も來世の福果を得むものと稱名に餘念なき折からに、この度、島に流されたる、日蓮聖人を多くの人とれなじく大惡僧よ惡知識と誤想し一刀の下に人しらず殺さむものとなしたり、

佛法王法の名分と義理を聞につけ、遠藤爲盛は、心機一轉して　盲龜浮木の便りを得たり、日頃の煩悶は、消されたり、

うれよ、慷慨悲壯の涙は、甘露の涙に融和せられて遠藤爲盛は、阿佛坊妻ハ、千日尼と授戒とうけぬ

うれより、このかた、阿佛坊の遠藤爲盛は、妻諸俱に日蓮聖人に、すがり奉れり、ひるは、人目を恐れて夜中に食をねくり、ある時は、國の責をも憚らず聖人のために身にも贅らむとせり、

阿佛坊夫妻は、法華經の光明によりて、多年の雲霧は霽にけり、

日蓮聖人は千古の大偉人なり、阿佛坊は志節ある義士也、偉人義士は、國の寶ぞ、歴史の光なりとせば、二十年雪中に疾苦を嘗め給ふ順德院を御介抱なしたる阿佛坊、雪に膚とまじへ、草を摘みて、命をさゝへたる日蓮聖人を供養なしたるゝ、阿佛坊は日蓮聖人と俱に、我國正史の内容に於て、美なる山河と偕に永遠に光明を現實するものと謂ふ可し、

日蓮を戀しく御座し候はゝ日月を、拜みませ給ふべし、いつとなく日月に、影を浮ぶる身なれば、なりとは、大偉人の行爲は、日月の光明とれなしく空間に輝やくを宜べ給ふ也、

阿佛坊は、この光明につゝまれたり佐渡の雪は　越路の雪よりも歴史上數多の趣味とふくめり、

（墨　堂）

來者不拒

大日蓮の論評に就て

孤松子

山水秀麗なる我大日本の國、其國粹の人格的に發現し來り、一大宗教家となりて天下に活躍し、歴史と共に其芳ばしき名を後代に語られ、大八洲民族中の麒麟と仰かるゝ我大日蓮、而かも此大日蓮の研究論評は、古來幾多の人士によつて紹介せられたり、然れども吾人は遺憾ながら、未だ圓滿なる大日蓮に接するを得ず、蓋し惜むべきの事と謂ふべし、

大日蓮に對する多くの評論を觀るに、概して門外人の手によつて公けにせられ、其門下に屬せる人の筆を染るもの、甚だ其尠なきを感ずるなり、否寧ろ今日に於ては殆んど皆無と謂ふも、決して誣言にあらざるを吾人は信ず、大日蓮の世に謬まらるゝに至る、豈所以なしとすべけんや、

而して大日蓮を窺はんと欲せば、單に歴史上に顯はれたる英雄偉人、うれらを研討せんとするが如き方法によつて、之を識了せんとするが如きは、即ち不可能の事たるを免かれず、所は敎傑たる我大日蓮は、世人の所謂英雄と呼び、若くは偉人と稱するものとは、匹儔すべからざるものにして、全たく其方面に頗異あるを以てなり、

世の英雄を以て推すものを觀るに、時代の風運に乘じて政權を握り、又は武力を以て天下を制し、或は謀略を以て乘じ將ゆるもの、殆んどうれらに類する運命の寵兒を以て、英雄とし偉人とし豪傑とす、換言せば多少群俗に秀たるものに擬するに、直ちに呼ぶに此名を以てし、亦は少しく大なる成功を遂たるものに、捧ぐるに此名を以てす、英雄なるものゝ價値果して斯の如く、夫れ微々たるものなる歟、

此の如き英雄なるものを研究するが如き、小なる眼光狹なる考慮を以て、我大日蓮と攻究せんとす、宛かも竹管を覗ひて天體を窺かふものと、相去ること實に遠からざるを思ふべし、吾人の未だ滿足を叫ぶべき、大日蓮に接せざるを感むもの、亦怪しむに足らざるにあらずや、

古來大日蓮を論評するの士は、祖書幾百章の大言論を拜せるも、未だ其眞意義を咀嚼すること能はず、雲を呼び雨を起すが如き大文章に接し、讀過一番剛健なる筆力に敬服して、自已が判斷力を忘失し、爲に其文字の裡面に大眞理の潛めるを知らず、卷を通して何等得る處なく、唯崇高の感に驅らるゝのみ、而して大日蓮を論評せんとす、其筆尖の漸やくに皮を寫すに止まりて、未だ肉に及ぼさず、況んや其骨髓に達するを得べけんや、

吾人は斯く論じ來るも、大日蓮を崇拜するの餘りに之を謂ふにあらず、深く攻究を盡したるの結果、而かく論斷せざるを得ざるなり、

世の論者の大日蓮を論評せしを見るに、多く其著作にかゝる三百餘章の遺文に、最とも重きと措けり、而して其重きを置にもかゝはらず、遺文に胞胎せる處の敎義、うれに向つて何等研究を試みず、唯大日蓮が血と淚とを以て買たる、悲風慘愴たる事蹟の記述なる、清澄山頂の立敎開宗に際して、地頭東條の法難を始めとし、伊豆の伊東の流罪、小松原に於ける大難、若くは相州龍の口の頸の座、或は佐渡塚原の遠流等の、幾多法難厄害に圍繞せらるゝも、晏如として其主義を拄けず、一難來る毎に其主張の熱度を昂進して、毅然として生涯を主義に捧げられたる、其偉大なる氣慨に思惟を傾注して、未だ以て大日蓮が何故にかくまで、厄難と戰かはれしかを思索せず、直ちに數多の法難に屈せず、其主張を維持せられたるものに向つて、彼等は尊敬を拂ひ渴仰と捧るのみ、斯の如くにして我大日蓮を論評す、豈吾人をして滿足と叫ばしむるの價値、之を求むるに難きや論なきなり、

大日蓮を論評せんと欲せば少なくとも、把持せられたる處の敎義、そのものより研究し來りて、其事蹟に筆と進めずんばあるべからず、大日蓮の一擧一動は悉く之れ、活ける敎義の發動なりとす、若し大日蓮より懷抱せられたる敎義、うれを除き去らば餘す處何物かある、眼横鼻直なる一男兒のみ、吾人の尊敬を拂ひ渴仰を捧ぐる處、實に之なきにあらずや、

復た思ふべし、古來歴史上に現はれたる、英雄豪傑と稱するものにして、果して我大日蓮の如く、一笠孤杖の身を以て、人類救濟の大義を呼號して、滿天下を搖動せしめたるものあるや如何に、旗と劍とを以て爲したるものは、吾人之を聞けり、謀と兵とを以て爲したるものは、吾人之を聞けり、時と力らとを以て爲したるもの、又吾人は之を聞けり、然れども未だ單身大眞理を叫んで、幾多異敎徒の迫害と戰かひ、赤手以て國家人類に救ひの道を傳へたるもの、我大日蓮の外に果して誰かある、

或人はキリストを以て之に比し、或人はマホメットを以て之に擬し、或人はルーテルを以て之に推す、然れども吾人は快諾すること能はざるなり、

若し或點に於て此種の偉人と、途轍を同ふする處なきにあらずと雖、懷抱せる處の大眞理、主張する處の大主義に至つては、實に天地霄壤の差を有し、同日に論ずべきものにあらざるなり、

我大日蓮の奉戴せられたるものは、宇宙に冠絶せる大眞理なり、其大眞理は則ち妙法蓮華經にして、此妙法蓮華經は、久遠本佛の印度に應現せられ、伽耶始成の假粧を打破し顯本

して、無限の本住法絶待の自證法なることを、縱横自在に說顯せられたる、一代七千餘卷の眞髓たる法華經、其法華經に宣示せられたる、樞鍵を握つて天下に號令せられたるものにして、大日蓮の統ての行動は之れ、妙法蓮華經と稱する大眞理の活躍なるを知るべし、

然るに此妙法蓮華經とは何ぞやと問はゝ、うの何物たるを知らずして、妙法蓮華經の活動體を論評す、天下に大膽なるもの恐くば、之より甚しきはあらざるなり、吾人の滿足に價ひするものなきは、固より然る所なりと謂ふべし、

百步にして柳葉を射たる楊由基は、其妙術の秘奧に達したるが故にして、其的當するは論なしと雖、未だ堂奧に上らずして室の大小廣狹を論ず、誰か之に首肯を與ふるものあらんや、我大日蓮を論評せんとする、亦是と其理を一にするを知るべし、

而して由基の射法に妙を得たりしは、其熟練によると雖ども、此域に達せんとするにあたつて、確かに彼は其精妙を究むべきを、信じたるが故にして、其信じたる一縷の光明に向つて、鍛錬を施したるを以て、遂に射術の妙處に達到するを得たりしは、推理上何人も許す處ならん、

特に宗敎なるものは冷やかなる理論を以て、其妙境を究むべきものにあらず、然りと雖宗敎に又理義の存するや明かなるも、要は信念の厚きによるにあらずんば、唯だ佛と佛との間に究盡せられたる、一大眞理の妙法に接觸することの、最とも難事なるを想ふべきなり、

然るに天下の論者は、宗敎を研究せんとするに當つて、第一主要なる活ける信念を缺く、何ぞ妙處を開拓することを得んや、況んや其敎義の活動体たる、我大日蓮を論評せんとす、虎を描ひて猫たらしむるに至るもの、實に止むを得ざると謂ふべき歟、

吾人は敢て望む、若し人あつて我大日蓮を攻究せんと欲せは、先つ其主張せられたる根本敎義に向かひ、少なくとも研鑽の功を積み、ねばろげながらにも敎義の眞髓を探り、而して之に最とも熱き信仰を加味し、退ひて大日蓮の血精と濃かれたる、錄内錄外の遺文を拜して、大日蓮の言論動作に及ぼさば、茲に始めて完全なる大日蓮を論評することを得るなり、

然るに其評論すべき人物の、何によつて然く活動したるやを究めず、唯其活動したる事蹟のみを捕へて、筆を縱横に走らす、豈肯綮に中ることを得んや、吾人の未だ圓滿なる大日蓮に接せざると、悲しむの餘り、茲に其所見を天下の識者に訴ふ、將來大日蓮を研究せんとするの士は、失つ敎義の關門に信仰の割符を捧け、其目的に達到んことを勗めよ、(完)

師子吼の齋藤氏と日宗の加藤氏

鷹の眼生(投)

このごろ師子吼新報社の齋藤呑日氏と日宗新報社の加藤文雅との間に問答あり、法義上より云はゝ小問題として看過すべき事柄にあらず、加藤氏が日宗革新第二百七十五輯紙上に於てせられし答辨は左の如し

師子吼新報社齋藤呑日氏に答ふ

日宗新報革新第二百七十三輯(五月八日發行)白濱獨詰其七末法唯一の大導師に就き師子吼新報社內齋藤呑日氏より一封の郵傳を寄せられ二箇の質疑を列れて本社の加藤師の答辭を徵せらる其質疑の一に云く

第一に問ふ本門壽量の本主と云へば本門の敎主釋尊なることは誰か是を疑はん然るに釋尊と宗祖と相對せしめて蓮祖を以て本門壽量の本主とは前代未聞の說なり就ては蓮祖を以て本門壽量の本主と云ふは如何なる理由ぞや其道理と文證とを詳明に示され度し

答て云く先づ釋尊と宗祖との相對は文證近く觀心本尊抄にあり「彼脫益此下種後一品二半此但題目五字」と云へる文是なり次に蓮祖を以て本門壽量の本主と爲す文證は御義口傳に在りて萬人已に悉知するところなれば今更憑耳驚心して前代未聞の說なりなんと嗤ぐ可きに非ず又其理由は同く御口傳に「此妙法非二釋尊妙法一也」の御妙判あり其を拜讀したる人は能く其の理由をも疑ひ奉らざるなり萬と御愚惟これあるべし

第二に問ふ敎主釋尊の無上最尊なることは誰れか之を疑はん然るに佛祖釋尊と宗祖日蓮大士と相對せしめて敎主釋尊より宗祖日蓮を大事とする理解し難し是れ亦道理文證とも明に示され度し

答て云く「敎主釋尊よりも大事の日蓮」とは宗祖の金口より出でたるなり其が理を解し難しと云はゞ呑日氏は初より宗祖を疑ひ奉る他宗禪門の一類なるべきか、若し然らずして幸に本宗の徒たらば謹で宗祖の金口を信じ奉るべし信地苟も決定したらん人にして疑惑を此の點に起すべき理由なきことを萬と反省あり度し

右主筆の命を奉じ答辨すること此の如し匆々

五月十九日稿　　社末　一領子

右の答辨に對して必ず顯るべきは齋藤氏の辨駁ならん、到底加藤氏の答辨に滿足あるべきものに非ずと察すればなり、この場合に於ては加藤氏も亦堂々對戰あるべきを信ず、愉快なる哉、予輩活目して其陣ぶりを觀ん、決して對岸火視するものに非ざるなり、

(附言、御書上より得たる法義の新案は、其御書上に拜讀したる際に於て會通すべきの必要あり、譬へば敎主釋尊よりも大事の日蓮と云へる一文あればとて、直に爾々斷決すべきか、假令爾く斷決すべきものなりとするも、彼處に此處の文面と正反對の文句ある場合、此衝突せる二者の文言義旨に對し會通せざる可ちざるは勿論ならん、吾日蓮聖人の御義は其方面及主客等の觀察を明にして、而して之を拜讀信解せずんば或は誤信に落入ることなしとせず、世間學者のたま〳〵祖書を讀むも途に半面の觀察に終るが如き、或は全然觀察を誤る如きは是が爲なり、聖人の言語が正しき會通了解より離れて或は矛盾に見、若くは一方に偏重するが如きは御弟子としての罪過少からざるべし、可愁歎)

統一團報

◎宗徒大會大阪に開かる

聖祖門下各敎團宗徒大會に就き今其概況を報せんに、宗徒大會の準備員としては同地在住の各敎團の人々にして佐野貫孝、深川觀察、清瀨貞雄、嶋村日正、伊東智靈、の五氏之れが盡力に努められたりとのことなるが其効空しからず大會はいと盛んに開かれたり、各地より來會せる人々も亦少からず開會の初日則ち廿三日は來たりぬ、廿三日の午後一時より大阪公園なる中の島公會堂に先つ協議會を開きたり、而かして名刺の交換各挨拶等を終り大會に關する議事條項及ひ庶般の事項を打合たり、かくて同日午後六時より同堂に於て大演說會を催ふしたり、今其演題及辨士の姓名を得たれは左に掲く

開會の辭　佐野貫孝師
安住實智中　平井學後師

主義と理想　能仁事一師
日本臣民と日蓮大士の門下　山川傳之助君
開宗日相觀　段證依秀君
性靈の危機　深川觀察師
靈的信佛　深見靈照師
教の心　大橋玄章師
所謂統一主義　野老乾爲師
統一と合同　野口義淨師
統一に於ける疑解　清瀨貞雄師
聖祖の性格　槇村日正師
統一的成立宗教　本多日生師

始め演說會は廿三日のみなりしが所々より來會せられし勇奮活動の諸氏にしていかで默して止むべき茲に於てか懇親會を轉して演說會を爲し諸氏の熱血を吐露せしむるゝとゝなれり廿六日午後六時より同堂に於て前日に殘れる諸氏の演說開催せられ聽衆數千人の多きに及べり而かしてこの間本化大阪青年會附屬少年隊の唱歌隊は始中終清く愛らしき聲もて能くオルガンピヤノに唱和して拾五六名の少年女子この神聖なる靈的會合を妙助妙化して一層の感動を深からしめたり

二十四日（陰曆四月二十八日開宗の聖日に當る）二十五日の兩日に渉りては昨年第一宗徒大會に議し置きたる十有余項の大議事其議決せる條項に基き第二宗徒大會は實行部面に專ら力を盡くすべき方針を取りたり

議事日程及議事方案

（廿四日午後一時より五時迄）

一　第一回宗徒大會決議事項經過報告及將來の希望、
一　各教團聯合大學林設立に關する實行方按
一　聯合大學林設立に關する各派交渉委員の選定
一　宗徒大會期成同盟會々則改正方按
一　快議實行遊說に關する方按
一　夏期講習會の件
一　第三宗徒大會を來年春期を以て京都に開催するの件

大旨條項は如斯なるも緊急動議として顯はれたる二大要項は即ち一は皇室に對する宗教的敬禮の實行を各派管長に勸告して其教團へ訓令せしむるの件他の一は即ち第一宗徒大會に議決せる合同統一の件に關して未だ回答し來らざる日蓮宗管長に對してこの大會は大に催告狀を發して其確答を促すこと及其他未回答の宗派管長へも同しく其確答を求むることの二件は滿場の起立を以て可決せり　第二大會は比較的に實行に近き來れを見る吾等は實行の道程を歩む人々の爲す所を見ん

幹事長（普通議事に於ける議長）には本多日生師を推薦し同師は病余のことに就きとて辭されしも是非にと推薦したるを以て承諾せられて之れに當られたり

幹事には

槇村日正　佐野貫孝　清瀨貞雄　深川觀察
能仁事一　中川觀秀　伊東智靈　小倉豐三郎

右八名の幹事代る〳〵說明の任に當り目出度議了し萬歲を唱和して閉會せり

右は大阪團員の通知する所なるが尙ほ廿三日の會合等に付日宗新報は委細を報ぜり左に轉載す讀者參酌して之を知れ

▲發表大演說會　聖祖門下が翹望せし第二回宗徒大會は明廿四日を以つて開かれんとす大阪の地何んぞ幸榮なる前には本化宗學研究大會の開かるゝあり今亦淸淨なる宗徒大會は開かれんとするに非ずや決議する所何者ぞ吾人は多言せず昨年東京に開かれたる第一回宗徒大會に徵して明かなり四方雲の如く集れるの人悉く憂宗慨世の人にして皆聖祖門下熱誠敬虔の僧侶なりあゝ宗徒大會吾人は多大の希望を屬す

茲に大會を機として聖祖門下合同大演說會を中の嶋公園の公會堂に開く時は五月廿三日の夜なりき大會準備員諸師は朝來諸般の準備に奔走せられ內外の粧飾等莊嚴の美を盡したり會堂は名にし負ふ大阪第一の演說場にして數千の聽衆を容るゝに足れり演者は本化門下有道の士信念枯渴せる大阪市民はこれに依て大なる光明に浴せられん

夕暮電燈の爆き初めし頃早くも聽衆は押寄せ來りぬ午後六時過ぐる頃は階上階下人を以て充滿されたり囃唄の音樂は講壇の一隅より起りて滿場に澄み渡りぬ闘を排して十數名の少女花の如き姿をなして微妙の聲を打ち凞はせ『君が代』を奏し初めぬ霰の降るが如く拍手の聲の起れるは是演者の登壇を迎ふるにぞある演者と演題とは如何に

開會の主意　佐野貫孝師
安住實智中　平井學俊師
主義と理想　能仁事一師
日本國民と日蓮大士の門下　山川傳之助君
統一的の成立宗教　本多日生師

本化青年會の唱歌員石川つゆ子、貫名だい子、二女子の祝辭あり右終りて『宗歌』奏樂あり次に佐野貫孝師は登壇せられたり

昨年は開宗六百五十年の紀念に際し各派の人々が一堂に會して宗徒大會を開らきたり今年亦大阪にそが第二回宗徒大會は開かれんとして各派の人々は雲の如く集れり吾人は之れを機として演說會を開きたるなり

抑も　日蓮聖祖が遠く六百五十年の昔に宗門を成立されたる目的は如何諸教諸宗を統一し國土と人類との成佛を期し給へり然るに　聖祖門下の有樣は何ぞや如是は　聖祖の大理想に違背したるものなり吾人目下の急務は各教團を統一し　聖祖の大主義を發揮するにあり

と獅子吼一番せられ降壇せられたり此間また『宗歌』の奏樂あり次に平井學俊師は登壇し『安住實智中』の題下に明快の辯を以て

諸君よ諸君の憶想妄見を去りて佛祖の實智に安住せよ諸君は一身の安寧幸福を希望する以前先づ國家社會の安穩を祈るべきなり而して始めて佛祖の實智の中に安住し諸君の身体は成佛すべし

此間『たから』の奏樂あり石終りて能仁事一師は登壇し『主義と理想』てふ題下に

主義なき人は死せよかし日本國の他に超絕する所國民に大なる主義あればなり然れども今の日本國民果して主義ありや否や吾人は寒心すべきものあり今の宗教界は如何人は日蓮聖人を知らざるなり聖祖の大主義を知ざるなり諸君よ早く日蓮聖人の大主義に來れかし理想なき國民は哀れなり理想なき國民は野蠻なる國民なり今日の國民は如何大なる理想ありや亦　聖祖門下の人々果して高尙なる理想ありや彼等は迷信を尊べり野蠻なる人々なり諸君よ早く來りて　聖祖の大主義大理想の中に融入せよ

と滔々數百言、熱誠の辯を以て述べられたり、次に『慈悲』てふ唱歌あり、期成同盟會の中川觀秀師は登壇し、宗徒大會の歴史と内容とを述べ、明日開かるべき宗徒大會に多大の希望を囑せり、諸君よ乞ふ奮て來會せられよ、吾人は諸君と共に、宗門の將來を語らんなりと、此間『忍辱』の奏樂あり、右終りて山川傳之助君は登壇せられ、『日本國民と日蓮大士の門下』てふ題下に敬虔温順の態度を以て縷々として說かれたり、

日本國の祖先天照大神は三種の神器を以て皇孫に授け給ひたり、三種の神器とは何ぞや、智仁勇を表したるなり、法身般若解脫を表したるなり、智情意の三を表したるなり、これ即ち人間の則るべき大道を示されたるものなり、この大道は萬世不易の眞理なり、眞理と實行とを同化したるものはこの神器なり、而して日蓮聖祖は此大道を以て、世界統一の理想を呼號せられたり、腐敗せる現國民も、此の大道と日蓮聖祖の大理想とを扶養すべきなり、

右終るや、「オルガン」と「ヴァイオリン」の嘲曉たる合奏は初まれり、微妙の音樂に滿堂の聽衆は醉へるものゝ如し、次に大會正本多日生師は登壇されぬ、會正は現今病軀に惱み給へり、さるにたゞ宗門を思ひ給へるの餘り、二白里の山河を遠しとせず、參列し且つ演說を試みらるゝとは吾人の深く感謝する所にこそ。

予は昨年の宗徒大會には發企者の一人たり、而して今日も期成同盟會には責任を有せる一人也、當地に於ける田中智學先生東京に於ける脇田會正等も同じく盡力されたる人々なり今回當地に開かるゝ宗徒大會には是非とも脇田會正は來らるべき筈なるも將に開かれんとする日蓮宗々會の要務の爲に來る能はず代理として清水梁山氏來らるべき事となりしが之れ又千葉縣に於ける耶蘇教破斥の爲めに來られず遂に東京よりは予と小倉氏との二人のみなりしなり予は此の祝すべき宗徒大會に參列し且つ熱心なる諸君に對して一場の演說を爲すとは予の榮譽とする所にして亦感謝する所なり

而して會正が多年研究せられし統一宗教に就て明確なる說明と與へられ純一的宗教の成立は日蓮聖人によりて始めて實行さるゝなり諸君は偉大なる聖人の主義理想に融入せよ諸君は此に依りて救はるべし清淨なる信仰を以て偉大なる本尊に接觸せよと時に時辰は十一時を報じければ會正は他日を期して拍手聲裡に降壇せられたり

花の如き少女は進歩を移して「女子の道」を歌ひ右終りて某氏は登壇し萬歲を三唱し聽衆之れに和して隨意散會したりあゝかくして發表大演說會は終結を告げたり

▲第二回宗法大會(會議の概要)　去月廿四五兩日を以て大阪中之島公會堂に開かれたる第二回宗徒大會は昨年の第一回のうれに劣らざる盛に會して來會者數百君、中にも田中智學居士が兩日とも宗學研究大會學生百五十餘名を率ひて臨席せしは人目を惹けりさしも廣き公會堂も人を以て埋められ特に傍聽席の如きは立錐の餘地だもなかりき本多日生師を幹事長に佐野貫孝島村日正清瀨貞雄深川觀察能仁事一中川觀秀伊東智靈小倉豐三郎の八君を幹事に推擧し靈的議會は　聖鑑の下

に開かれ而して閉ちられたり決議せし所宗徒の最も注意すべき事項たり

●懇親會と演說會　去る廿六日住吉に開くべかりき懇親會は都合によりて之を見合し廿五日夜を以て大演說會を中之嶋の公會堂に開きたり出席辯士は

泉泰運師、片野玄貞師、野老乾爲師、少倉豐三郎君、大橋玄章師、野口發覺師、

等の諸氏にて盛大と極めたる此演說會は午後十一時過き拍手喝采い中に閉會と告げたり此夜本化青年會の唱歌員は辯士の登檀毎に唱歌を謳ひて一段の花榮を添へたり

●岡山通信　例により篤信會開會の摸樣等あらまし御通知候はん去月は寺主能仁事一師京大阪各處御巡敎の事とて定日の日ぜりも漸く延び行き遂に去月三十一日を以て開會致し申候其の日は折り惡しく雨降り且節句の事とて蔓々敷聽衆も無らめと思ひの外豫て敎風を慕ふ同處の誰れ彼れ集れる者無慮三百餘名中々盛會にて有之候其の日の辯士演題左の如し

開會の辭　中川事顯
人鉢内に寄生する動物　野上壽惠吉
日出ぬれば燈詮なし　中原鶴藏
信行の實義　松崎事成
時代の要求せる宗教の論點　能仁事一

と順次演了致し申候尤も中原氏は各地見物の砌り當地に立寄られたるにて候良醫と以て名ある野上氏能辯にはあらざるも中々斯道に於ける熱心家とて皆々滿足の色を呈し申候當地は本宗にて或は衛生より或は宗敎より迷信の非を談じ雜乱の惡弊を叱し候ひしかば近頃になりては迷信輩も聊か耳を傾け反對の勇氣も摧け一向大人しく聽問致し居候何時かは正道に歸すべき者と存じ益々熱心布敎に從事致し居候

次に寺主能仁事一師の徒弟中川事顯師此度有志諸氏の資により去る六月一日を以て東都遊學の途に被登申候熱心家なる中原氏により住食の仕給を諾せられ小林本多の二大僧正により て薫陶の幸榮と得らるゝ宗祖に慶賀すべき事に候乞ふ師よ幸に信念を維持して勉學の歩を進め他日錦を着て古郷に歸り師の手に依て世間迷暗の霧をさまし日月の光明の能く衆の闇迷と除くか加きの日を切望に堪へず候(横山生)

●祝賀會　昨明治三十五年の顯本法華宗に於る政變の爲に不圖の災禍を招きて宗門の僧侶田邊善知氏等か刑事被告となりしも今回無罪の宣告を受け宗門の歴史を穢さざりしは一は宗門の爲に祝し二には各本人の爲に祝すべき事なりとして六月二日山岬日曄氏今成乾隨氏松田宏槃氏發起となり東京寺院の有志相催し淺草に於て祝賀會を催し被告となりし人々の方よりは小高日唱古定賢正鈴木孝碩の三氏出席し席上今成氏の祝辭及び小高氏の答辯あり最後に宗門の萬歲を祝して散會せしといふ當日は小林老僧正にも臨席せられたる由

寄贈新刊雜誌

人間新誌　第十二號　大分　同社
新佛教　第九號　東京　博信教會
家庭　第三卷第六號　東京　同發行所
文の友　第二卷第六號　東京　以文會
無盡燈　第八卷第六號　東京　同社
佛の教　第二號　東京　佛教發行所
和融誌　第七卷第六號　廳布　其社

教友雜誌　第四二〇、四二一號　甲斐其社
十善寶窟　第一五八輯　小石川目白僧園
日本之柱　第一一九號　大阪立正社
妙好華　第三卷第五號　芝沾涼社
東亞の光　第四號　神田會身庵
妙宗　第六卷第六號　鎌倉師子王文庫
佛教教育　第四十號　阿波其會
北友雜誌　第八十六號　函館其社
新世界新聞　第一七九號　築地其社
高輪學報　第十八、第十九號　高輪佛教大學
慈善時報　第七號　鶴井育兒院
日宗新報　第二七五、二七六、　池上其社
智嶺新報　第廿七號　芝其社
六條學報　第二十號　京都壬寅會文藝會
佛教文藝　第一卷第五號　淺草佛教社
拈華　第三、四號　谷中微笑窟
同志の友　第六號　三河四參同志會
續肇界　第三卷第六號　巢鴨其發行所
四明餘霞　第一八九號　近江天台宗事務文書科
師子吼新報　第十四號　麹町其社
道交會報　第五號　隅田其社
樞鍵　第一七九號　大阪其社
大道叢誌　第一四一號　本郷其社
法藏　第二十二號　京都其發行所
ひろめ　第十六年第六號　岡山其社
護法　第十三卷第六號　芝湯島社
德風　第一〇一號　三河其社
政教時報　第四卷第三號　本郷大日本佛教同盟會
三寶　第四號　麻布森江書店雜誌部
二十世紀農報　第三卷第六號　大阪植物試驗場
加持世界　第十編第六號　小石川其社
東洋哲學　第十四號　小石川其會
奥隆月報　第百五號　京都興正寺
博愛　甲斐峡中博愛和

顯本之光

果敢より離れし心地の平靜さよ

忍水居士

手にむすびし水、うが上に宿れる月かげの有るか無きかの世にすまへるは實に人生の樣なりけり、孤燈影暗きはとり、夜更け人定りて、うゝろに此の世を觀れば『世皆不牢固、如水沫泡焰』の聖語いまさらのやうにて身心しみわたるばかりなり。

もはや思ふまじ、今の世にさる厭世なる言を聽く人もあらねばと幾度か心おさゆれども、無常迅速、榮枯盛衰は疑ふべくもなき浮世の樣にして、貴はよし巨萬の多きを積んとも、麥はさぞ傾國の艶を衒ふとも、月は虧げ花は散るのためしにて何かは嵐の吹き來さば、あはれや昨日の榮華昨日の花顏夢と消へ幻と醒めなんに、されば日蓮上人は

思へば一夜のかりの宿を忘れて幾の名利をか得ん又得たりとも是夢の中の榮珍しからぬ樂み也

と敎へ、また小町の

花の色はうつりにけりないたづらに
わが身世にふるながめせしまに

の嘆さてうとばかり也、出るには馬車あり入るには樓閣ある金瓚玉斧の華者もいかで盛りは賴みならず、さては雲の鬢あざやかに雪の袂を飜へせる胡蝶輕裝の乙女も何時までか若きを賴まんや、天上五衰の苦も思ひ合されてこゝろをつまましぬ。

さるにても、我等人には如何にしてか之が榮枯無常とまぬかるべき、紅をぶる曉の空うすゝみ色の山の影にも忘れがたきは四苦八苦の憂、樂と云ふも苦中の樂に過ぐべきかわ、殊に死てふものゝ黑き布もて年・月、日、刻とすきまもあらば此軀を包みさらはんとねらふものを、嗟はかなき吾等は如何にしてか之れが覊絆を脫れ得べき『出る息入る息をまつことなく風の前の露なほたとゐにあらず』足下霜を消すの思ひなるかな。

よし思ひあきらめなむ『三界無安猶如火宅』のいましめあり、處詮金剛不壞ならぬ無常身の我等、あるは徒に身の榮を望み、あるは又壽命の永きを願ふとも、幻はたゝ能はぬ空だのみのみ、ふける想のみ、我も人も思ひ切らなむ思ひ切り給へ、さらばいかにせむ、いで此に賴母しき鐵の鎖垂れたるを見出しぬ。

妙法蓮華經如來壽量品第十六、顯本遠壽常樂我淨の無上身を說示し給ひたる聖主は、いかに其末段に述べ給ひしぞ。

毎に自ら是の念を爲す何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就なさしめん

これは是れ斯も苦しめる我等衆生をいかにすとも救濟ばやとの大慈悲語ならずや、み佛は三界を我有とし給ふ、其中の衆生は悉是れ吾愛子と見給ふ也、さらば慈悲の情いやが上に深く量り難く高く、一切衆生の苦は佛御一つに苦み給ふ、いかで之が憂患をのぞき給はんとはし給へり『唯我一人能爲救護』の御誓言は我等全身のしびれいゆるの心地なり。

あら嬉しや佛陀救濟の御手は垂れぬ、吾等が辿れる細道には燈の誘を得たり、靈山淨土は近かるべし、行くべき大道は其處なるぞ、佛に慈悲あり我に信あり、『已今當法華最第一』の御經こそ正しく救の鎖なり、正しく行くべき乘なり、心たしかにすがれや、乘や、

我の如く等くして異ることなけん

の御言の葉明諦なれば『一切衆生皆成佛道』は些の疑を挾ひべきならず、

この人佛道に於て決定して疑ひあることなし

の御聖言明瞭なれば『即身成佛』は少しの思ひやりをのこす可らず、かくて我々は心安かなれ、月のまぞらかに澄み渡りたるがやうにて身の浮雲のかゝらずなりぬ、無常迅速榮枯盛衰におだやかならず波たちし心の不思議なるまでに靜かなり平穩なり。

我は今深き信の心を起して御佛の御手にすがりたり、燦然

として息まざりし火宅の苦は失せ去りぬ、安處し給へる御佛の眞實は之を會得しぬ、「天人常充滿、寶樹多花華」の思は胸に滿ちぬ、げに「娑婆即寂光」の歡喜ならでや、かくてこそ春の花に歌を詠じ、夏の涼に香をたき、月下に經を誦し、雪窓に法を語らなん、さらばよ果敢のかなしみ何處にかある、吾等はまばゆきまでに莊嚴き御佛に會ひまいらすことの定りたり、いかに勝れたる淨土に至るべく定りたり、この世の小さき苦痛何のうの、この短き命何ぞおしき、法を求りて死せや人、佛を慕ひて死せや人、長き命に吾この細き命をかゆるなれば

一心に佛を見たてまつらんと欲して自身命を惜ず

と法華經には敎へ給へるにあらずや、この心地に住して唯一乘の妙法を持ち、ゆめ退轉あるべからず、上人曰く

何なる時節ありても毎自作是念の悲願を忘れ何なる月日ありてか無一不成佛の御經を持たざらん

げに〳〵肝に銘すべき心得にこそ、さらばよ吾等は現當二世の處願決定圓滿なるべきぞ　あな尊や、あな嬉しや。

不如歸四句　　吉備　壽島庵主人

明日は誰が歌種ならん不如歸
月清き竹の都や不如歸
その山のうらは都ぞ不如歸
都にも田舍はあるぞ不如歸

來るべき百號に就て

二ヶ月後の本誌は其齡滿百壽たらんとす、人は彼の揚言に烟化せられんとし、將に來るべき暑氣に蒸熱せられとする頃日吾曹何を好んでか殊更に飾言大語して百齡を迎へんや、さりとは云へ敎義統一を以て任ずる吾誌、亦一の紀念として多少の清裝を爲さずして可ならんや、吾團聊豫期するものあり、讀者請ふ之を待て

注　意

一百號に論文祝文詞歌等御寄稿被下候方は七月二十日迄に願ひます

一百號掲載の投稿は紙面に限りあれば長編ものは遺憾ながら御斷り、小さくとも金剛石的のもの苦心意匠の凝たものを願升

一購讀者にして余分入用の方は豫め申入置被下度候

編輯部

盂蘭盆會の施本

來月は御存じの通り盂蘭盆會でありますが、これにつきては且家へ御布敎用として「法の鼓」を御配布なさるは、至極もつて來いの思ひつきであらうと思ひます、ついでに團にをきましても御都合を思ひ、來月の分は盂蘭盆に關する記事と書くことに致します、しかし團の方でも印刷の都合がありますから至急に入用方御申越を願ひます、

六月一日　　統一團法の鼓部

廣告

事件の始末と謝辞

昨春我宗門大學林生徒同盟休業の餘波、千葉縣下有志僧侶が前の管長及前の宗務職員長谷川日濟等の非違の執行を尤め責任を問はんがため、昨年三月廿四日內務大臣へ陳情書を差出し大臣は此書を管長に向て答辨を求めたるに管長等は答辨の辭柄に窮し宗敎團体の管理者として不穩當なる擧に出で總監長谷川日濟自ら告發人となり、自分等を以て私印盜用私書僞造行使の刑事被告と爲せり、東京地方裁判所は昨年四月廿七日より、一年餘の間に證人の喚問四十六人、豫審期間十ヶ月、公判四回を重ねて審理を盡し、其間被告の囹圄に在る短きは七十五日、長きは十ヶ月に亘れり、辨護士重野久太郎氏、磯部法學士、松長光吉氏、松本群太郎氏、板倉中氏の辨護と經て、去月廿七日刑事第四部島田裁判長より全部無罪の決定を受け、小生等は茲に始て寃罪を雪ぎ本來の面目を揚ぐるを得たり、是偏に　佛祖の冥助と辨護士諸氏の盡力と、知遇諸子の御蔭なりと信じ深く感謝する處なり、自今己後、愈々志念力堅固にして大法を護持し、以て　佛祖の鴻恩と師友諸士の芳志とに答へ奉らん事を期す、

明治三十六年六月二日控訴時効經過の翌日

田邊善知　小高日唱　藤崎通明
上田事古定賢正　小竹乾精　鈴木孝碩
前田孝信　佐野泰信

櫻井榮山主筆

佛の教

第十九年第貳號
（毎月一回發行）
一部郵税共金五錢
半年分金三十錢
一年分金六十錢

文學士 加藤玄智

本號目次

平和の宗教　同愛館錄事　○同愛館々則　○寄附金品報告　○贈與金品報告　○慈然なる一家　○不幸なる車夫　○醫師の同情　○加藤咄堂居士の同情

本誌は一面に慈善の鼓吹に努め一面に東京市内各所に於て開かるゝ佛教演說會に速記者を臨ませ各宗諸大家の演說を筆記せしめ一々講演者の校閲を經し上之を掲載し又速記者を同伴して諸大家を訪問し其說話を筆記せしめて掲載す其文章は談話体を用ゆべけれは座ながらにして佛教諸大家の演說談話を親く聞くの思あらん故に之を購ひ讀みたまはん人は稗益する處多かるべし

本誌に寄稿の承諾を得たりし諸大家左の如し

前田慧雲　加藤咄堂　大内青巒
增野晋洋　藤島了穆　佐々木月樵
田中治六　常盤大定　鳥尾得庵　高島米峰
近角常觀　黙雷生　順敬　島田蕃根　高田道見
島地黙雷　足立栗山　百目木智鏡　楠龍造　加藤玄智
織田得能　南條文雄　安藤正純　本多日生　唯信
其他

發賣所　同愛館

東京芝區愛宕町一丁目四番地

小生への音信は背書の所へ

東京淺草區南松山町四十五番地
松尾英四郎（忍水）

日本之柱

主筆佐野貫孝毎月十五日發行
一部金五錢一年分前金五十錢
發行所　大坂市東區中寺町　立正社

教友雜誌

主筆武田宜明　毎月二回發行
一部金五錢一年分金壹圓廿錢
發行所　甲府市稻門村　教友社

北友雜誌

主筆松森靈運　毎月十八日發行
一部金五錢一年分金六十錢
發行所東京市小石川區白山大乘寺内　北友雜誌社施本部

輪王

主幹川合妙鏡毎月十五日發行
一部金一錢一年分金十二錢
發行所　東京芝二本榎一丁　輪王新聞社

ひろめ

編輯阿倍正尹當分毎月一回發行
一部金四錢五厘一年分金五十四
發行所　岡山市野田屋町四八番　ひろめ發行部

日宗新報

主筆加藤文雅　毎週月曜發行
一部金五錢一年分金壹圓六十錢
發行所　東京府荏原郡池上村　日宗新報社

妙宗

主筆田中智學　毎月六日發行
一部金十錢郵税壹錢
發行所　相模國鎌倉要山　師子王文庫

御雛人形
附そゝ
小道具

武者人形

東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

岡山
呉服商
柿屋本店
店主久城茂太郎
（電話二六〇番）

柿屋 蒲團洋傘 店（岡山市上之町）

（電話二六〇番）柿屋太物店（岡山市上之町）

（電話二五五番）呉服卸 柿屋南店（岡山市上之町）

呉服卸 柿屋北店（岡山市車町筋一）

（電話一五八番）柿屋鼈甲店（岡山市中之町）

佛旗六金色價表
御寺院御幕 調進所 六金色唐縮緬製

種形別	並品製	上品製	新友仙	本友仙染抜
在家用	廿二錢	廿八錢	卅五錢	五十五錢
寺院用	四十三錢	五十錢	○	一圓三十錢
同極大	七十五錢	八十八錢	○	二圓二十錢

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢
御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕

京都市油小路魚棚南
御本山御用調進所 吳服商 高橋正意

團 告

一 毎月金六圓也
右岡山篤信會幹事各位より
本誌鉄道待合室備付補助金として御寄附相成り右及報告候也

一 金五拾錢也
右本誌基本金の中へ御寄付相成正に領收候也
六月十五日 統一團

岡山市 小松原熊三郎殿

一 金五拾錢也
右本誌基本金の中へ御寄付相成正に領收候也
六月十五日 統一團

作州勝田郡
古吉野村 石川寅之助殿

▲▲注意▼▼

●本誌廣告

本誌は既に全國各停車場へ備付居れり

本誌月定め購讀者へは

法の鼓と代無添付することゝせり、

（但月定講讀にして代金拂濟のお方のみへ）

毎月一回發行法の鼓は至極平易の文字にして法話あり小説あり、最と可愛らしき冊子也

▲讀者諸君

「統一」の隆盛と發達を成さしめ給ふは單に購讀者諸君の爲され方一ッ也 諸君か購讀料を拂つて下さらねば「統一」は衰退の止を得ぬ次第になります、

諸君の方では月々備か、の購讀料でも、團の方ではうれが頗る多額になるわけですから、此へん御察しを願いたい、

又「統一」は前號より全國各停車場に備付の事もあり月ぎめ購讀者諸君には法の鼓を添付することにもなりましたから、旁々運轉の油、つまり雜誌代を早く拂ひ込んでもらいたいのであります

統一團會計部

山根顯道校訂
顯本法華宗要品
並回向文

貳號活字總ふりかな附

此要品は顯本法華宗初心行者の爲めに校訂出版せしものにして、貳號活字總ふりかな附なれば、如何なる老眼にても判明に、如何なる婦女子にても「いろは」四十八字を讀み得る人ならば、易々と獨習の出來得る要品であります

實費にて頒興致します、但し前金ならでは郵送しませぬ

▲用紙上等黃仙花
▲印刷最鮮明体裁頗美麗
▲一部印刷實費郵稅共十四錢
▲五十部以上一冊十三錢〕の割
▲百部以上一冊十二錢〕

東京府荏原郡品川町南馬場
頒興所 妙蓮寺

六社同盟購讀料滯納者處分法

雜誌購讀料を滯納し遂に其支拂を果さゞるものは各社互に其姓名及事由を通告し其甚しきものは之を同盟各紙上に掲示することあるべし

明治卅五年八月二日伊豆伊東に於て之を決議す

日宗新報 教友雜誌 妙宗
北友雜誌 日本之柱 統一

施本

法の鼓

雜誌

本誌は頗る愛らしき小雜誌なり

本誌定價

一部	二錢
壹年ヶ前金	二十錢
十部以上	一錢五厘宛
五十部以下	一錢二厘宛
五十部以上	一錢二厘宛

本誌には組劇、戯敎、小説、和歌等あり

今般統一團より本誌を毎月一回發行致し只の印刷費のみにてお求に應ずる事に致しましたから何卒篤志の御方は檀家又は知人へ施本用として御買求め下さい澤山印刷すれば其だけ價を割引ますから續々御注文を乞ふ

○今日の良布教方法は

「法の鼓」を

施本するに限ります、小供でも婦人でも假名さへ讀める人は讀んで解る良雜誌

○施本には限らず本誌購讀方もお勸め下さい

東京淺草南松山町
統一團

統一

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
同三十六年五月十五日印刷納本十七部）
（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
同三十六年七月十五日發行統一第九十九號　毎月一回十五日）

第九十九號要目

○日蓮上人の釋迦牟尼佛觀（下）……
▲日蓮と軍事……
◎大恩教主を忘る可らず……
▲戰爭的文字は一の巧美文（日蓮の）……
○日蓮大聖人（第九回）……關田佛城
▲日蓮の敵は如何なりし……
◎字學研究大會に負笈せる諸士に望む……清瀨貞雄
▲日蓮は怒るものに非ず……
◎統一讀者會の光景……影山謙二
▲宗教革命の日蓮は果然强者なり……
◎人間の眞價を墜す勿れ……毛見遷喬
▲隨聽小記……皷の原人
◎第二回宗徒大會議事錄……
▲四教區だより、與門派の殘黨取方附始末等……
◎中央團友會廣告……

團告

（毎月補助金に付）

本誌全國各停車場待合室備付に對し其擧を贊し毎月補助金を申込まれし奇特家は左の如し

岡山市　久城茂太郎殿
姫路市　中村祐七殿
東京市　中原福藏殿
神戸市　齋藤金太郎殿
吳市　木村孝殿
品川市　大島良太郎殿
岡山市　篤信會幹事殿

千葉縣内左の各區本誌購讀料集金の義今般左の各師へ依囑候間何卒諸師の内へ御拂込被下度願上候也

第三教區　長生郡押日來光寺　山田日廣師
第四教區　仝郡澁谷行光寺　前田日應師
第六教區　山武郡清名幸谷東光寺　草切榮玉師
第七教區　仝郡御門妙善寺　飛山日甫師

他教區は追て依囑人名報告可致候

明治三十六年三月　統一團

本團發行の法の皷を施本せよ、布教雜誌としては恰好のもの也、委細廣告にあり

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞

一雜誌交換、寄稿共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は一割增但五厘切手を眞とす
一讀讀申込の節は住所姓名を階級にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町とし御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅六年六月十五日印刷發行
發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暐學
印刷所　北澤活版所
東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所　統一團
東京市淺草區南松山町四十五番地